

聖霊降臨節講筵

火を投ぜんとて来たり給いし主キリスト

——「守り」の信仰から、「攻め」の信仰へ——

2025年6月8日（京都）

奥田 昌道

守りの信仰ではなく攻めの信仰へ 信じて祈ったことは必ずそうなるよ 前向きなポジティブな生き方 プロダクティブな現実を約束 彼らみな聖霊にて満たされ キリストは我々を通して働かれる 主さまに自分を明け渡す 我は火を地に投ぜんとて来れり 我が名に在りて我に願わば 我これを成すべし 主の幼児であれよ 祈りたることは既に叶えられたり 祈り

●守りの信仰ではなく攻めの信仰へ

……天界におられたキリストが乗り移ってこられて、そして彼ら（使徒たち）とワンセットになって、一体となって、伝道活動を始められた。その意味では、キリストの僕たちが本当にキリストの証し人として活動を始めることができるようになったのは、この聖霊降臨で聖霊を受けて、聖霊が彼らとワンセットになって、活動してくださった。そこから始まっている。そのことを非常に小池先生は大切にしてくださった。

別な言い方をすれば、キリスト教会、キリストの弟子どもの群が本当の意味で誕生したのは、この聖霊を受けてからなんです。それまでは、キリストを十字架に付けたユダヤ人たちを、敵対する者たちを恐れて、まあ言うならば、ビクビクビク縮こまっていたわけでしょう。ところが、そういう弟子たちがガラッと変わって、本当にキリストの証し人として「生命を惜しみません」と言つて、伝道に乗り出して行つたのはこのペンテコステの、聖霊降臨節がきっかけでした。一般の教会ではどうか知りませんが、キリストの教会が誕生したのはこのペンテコステなんです。そういう意味で、小池先生は、この聖霊降臨節を非常に大事にされたというのは、私もよくわかります。

そして、今日の演題の、「火を投ぜんとて来たり給いし主キリスト」、副題として「守り」の信仰から、「攻め」の信仰へ」という。これを私は皆さんに強調したい。ここにメモを作ってきました。

「本日、聖霊降臨節の集会を機会に皆さんに呼びかけたのは、「守り」の信仰から「攻め」の信仰への転換ということ」

と書いた。「守り」というのは現状維持なんです。今いただいているものを何とかして守つて行こうということで、非常に保守的です。それに対して、「攻め」の信仰というのは、証し人としてキリストの証を積極的にやっていくという、いわば攻めの姿勢です。守りではなく攻め。これを私は皆さんに今日、呼びかけたい。



つまり、「守り」というのは現状維持にすぎない。それに対して、「攻め」というのは新しい事態を展開していく。まさにキリストの弟子たちがやったのはそのことなんです。それはペンテコステで聖霊を受けたから。

「火の如きものが降^{くだ}つて、舌のように分かれて一人一人の上に留まった」

ということを使徒行伝の2章で触れています。あれから彼らは本当の意味のキリストの証し人としての活動が始まるわけです。

そういうことで、今日皆さんに呼びかけたいのは、「守りの信仰ではなく、攻めの信仰へ」ということ。つまり、現状維持という保守的な状態から、新しい事態へどんどん展開していくという、「守り」に対して「攻め」という、新しい事態へ展開する。その転換点になったのが、歴史的にはこのペンテコステです。聖霊が降つてから、そういうことが始まった。そのことを申し上げたい。そして、皆さんにそれに乗っかって行つてほしいなと思うわけです。

●信じて祈ったことは必ずそうなるよ

御言をいくつか取り上げてみますと、まずマルコ伝の11章24節です。

「この故に汝らに告ぐ、凡て祈りて願う事は、すでに得たりと信ぜよ、さらば

得べし。」(マルコ11・24)

「すべて祈りて願う事は既に得たりと信ぜよ」と。まだ起こっていないんですよ。でも、

「祈つたら、それはもう聞かれている、必ず成就するよ」

と。これが私の言う「攻め」なんです。「守り」というのは、受けとっているものを後生大事にしがみついて、何とかそれを守つていこうという姿勢ですね。それに対して、「攻め」というのは、新しい事態へどんどん展開していく。キリストが皆さん一人一人に乗り移つて、新しい事態へ展開させてくださる。それを「主よ、たたえます」と言つて、主キリストと我々がワンセットになつて活動を始めていく。これが私のいう「攻め」の事態なんです。新しい事態へどんどん展開していく。まさにキリストはそれを願つてくださっている。そういうふうには私は思います。

キリストの言葉を挙げますと、マルコ伝11章の、

「凡て祈りて願う事は、すでに得たりと信ぜよ、さらば得べし。」

と。それからヘブル書11章の、

「それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり。」(ヘブル11・1)

これもまだ起こってない事態です。望むところを確信する。つまり、引き寄せるんです。将来起こるであろうことを、キリストが約束してくださっていることを、現在に引き寄せられている。そして、「既に得たり」として、「ありがとうございます」と、いわば先取りしていく。そうすると、そのことが起こっていくという。



普通の人間の考えというのは、起こってから、

「あつ、こういうことが起こった。ああよかった」

という、すべて事実を確認してから、「よかった」と、それが普通なんです。

ところが、我々の賜っている事態は、まだ起こっていないことに、それを「得たり」として受けとったらその通りになっていく。これは凄い素晴らしいことではありませんか。起こったことなら、誰でも納得するでしょ。そうではなくて、我々が賜っている世界というのは、「信じて祈ったことは必ずそうなるよ」

とか、何かまだ起こっていない、まだ見ぬものを既に得たりとして、将来起こるであろうことを現在に引き寄せて、

「いただきました、ありがとうございます！」

と言って、躍動していくという、すごくがめついですよ、言うならば。

普通は、現実が起こってから、地震が起こってから、「ああ、こわかった」と。「何々が起こるよ」という予報があると、そういう経験によって体験したことは受け入れていくけれども、そうでないものは「知らんよ」という感じなんでしょうけれども。我々が賜っている世界は、

「まだ起こっていないことを先取りして受けとって、感謝して讚美していきなさい。」

そうしたらその通りなるよ」

という、これに我々は乗っかっていけないといけない。

●前向きなポジティブな生き方

これは自分の感覚かもしれないけれども、今までは、起こったことを——普通の人なら「ありがとうございます」と受けとれなくても——自分としては「ありがとうございます」というふうに受けとっていく。これはあつたんです。ところが、まだ起こっていないことを先取りして、「いただきました。ごつつあんです」というような、そういう前向きな信仰。それは自分に乏しかったかなと、そういう気がしている。でも、キリストは、

「すべて祈りたることは叶えられたりとせよ。まだ起こっていないことを先取りして

受けとって、感謝して讚美して行きなさい」

と、物凄くポジティブでしょ、積極的でしょ。そういう世界にキリストは私たちを引きずり込んでくださっている。そうすると、普通の人よりも我々は喜ぶことが多いわけなんです。普通の人はまだ体験していないことを先取りして受けとって、感謝、讚美する。物凄くポジティブな生き方でしょ。

私は自分を顧みて、その点がちよつと乏しかったのではないかなと。いただいたことは感謝してますよ。けれども、まだいただいていないことについては、そんなにガメツク受けとっていないかったという、そういうことを自分としてちよつと反省している。



でも、キリストが我々に約束して下さっている世界は、世間の普通の人が経験に基づいて「よかった、よかった」と言っている、そんなレベルではない。

「もつともつと凄いことを先にあなた方に与えるんだよ」

と言つてらっしゃるように思える。それは普通の人から見たら根拠のないことかもしれない。我々にとっては、キリストが

「私が保証する。私がお前たちに約束しているのはこういう素晴らしいことだよ」

「はいっ、ありがとうございます!」

と言つて、非常に前向きなポジティブな生き方をしていけるのではないか。私自身を顧みて、その点が少し乏しかったのではないかなというようなことを感じたりした。

だから、今日、皆さんにうったえたいのは、「守り」の信仰、つまり現状維持という信仰から、「攻め」の信仰という、新しい事態を展開していくという信仰への転換です。これを皆さんに呼びかけて、皆さんにもそれに乗っかっていただきたい。それも、日常生活の中に、我々の日々の生活の中で、

「どんなことでも積極的に祈り求めていく」

という——いわば、「現状維持的に何とか守つていこう」というのではなくて——新しい事態をどんどん受けとつて、そして「ありがとうございます」と先取りしていく、そういう生き方が、キリストが我々に望んで下さっている生き方ではないだろうか。それでなかったら、他の人たちと何も変わらないではないか。

●プロダクティブな現実を約束

キリストが私たちに約束して下さっていることは、

「眼いまだ見ず、耳いまだ聞かざる、新しい事態を私は展開するよ」

と言つてくださった。それを誰において展開して下さるか。キリストを信ずる人間しかないではないですか。ということは、皆さんしかいらっしゃらないんですよ。そして、それを我々が受けとつて、

「主さま、ありがとうございます!」

と言つたら、主さまがいちばん喜んでくださる。

「よおく受けとつてくれたね! これで天地一如だよ!」

と。でも、この地上の人なら、現実を起こったことだったら、いいことが起こったうれしい、辛いことが起こった悲しいというふうに、現実が先に先行している。それによって、喜んだり悲しんだりしてやっている。ところが、キリストが約束して下さったのは、先取りして——世間の人はそうではない——

「あなた方にこれを上げから、受けとりな」

「はいっ、ありがとうございます!」



ということ。

「信仰とは、望むところを確信し、見ぬものをまこととするなり」

と書いてあるでしょ、へブル書に。「望むところ」というのは勝手な願望ではない。キリストが、

「これはあなた方に約束するよ」

と言つてくださった、そういう御言を根拠として、

「望むところを確信し、まだ見ぬものを、実現したいものを、得たりとして受けとつていく」

という事態です。なんと積極的な、プロダクティブ(生産的)な生き方でしょうか。それになかったら、普通の世間の人と何も変わらない。

我々は腕力なんかありませんよ。腕力はないけれども、キリスト様という凄い宝物をいただいているわけです。

「我等この宝を土の器に有てり、これ優れて大なる能力の我等より出でずして、神より出づることの顕れんためなり。」(コリント後4・7)

と、コリント後書でパウロが言ってます。それから、

「我らの顧みる所は見ゆるものにあらで見えぬものなればなり。見ゆるものは暫時にして、見えぬものは永遠に至るなり。」(コリント後4・18)

と。使徒パウロが告白してくれているものは、そういう神・キリストのほうから約束してくださる、普通の人はまだ味わったことがないようようなものを、先に先取りしてプレゼントとして、

「受けとりな!」

「はい、ありがとうございます!」

と。なんと我々は、キリストをいただいている者は、幸せな素晴らしいものを約束としていただいているか。それを十分に味わって「ありがとうございます」と言つてなかったら、申し訳ない。世間の人は、いただいて初めて「ありがとうございます」と言うけれども、我々はいただく前に、

「信仰とは望むところを確信し、見ぬものをまこととするなり」

で、「望むところ」というのは勝手な願望ではない。キリストが約束して、「こうだよ」と言つてくださったから、「はい、ありがとうございます」と言つて、それを受けとつて、それを既に得たりとして、感謝讚美していく。そういう物凄くプロダクティブ(生産的)な現実をキリストは我々に約束してくださる。皆さんは特権階級ではないですか。

いやあやっぱり、キリストをいただいたら、そのぐらいのことがなかったら、この世の人と何も変わらないではないですか。

「あの人はお金はないけれども、物凄いものを持っている。何かあの人を見てたら、



「すぐくうれしくなってくるわ」

なんていうような、何かそういうひとつの霊的な生産的な力を人々に分かち与えていくような働きを、キリストは我々を通してなさってくださるのではないだろうか。

それは自分がやるのではないですよ。キリストが私たち一人一人を捕まえて、そして働いてくださる。それが「証し人」ではないですか。証し人とは何を証しするんですか？ キリストの素晴らしさ、それを証しするんです。

別な言い方をしたら、キリストはクリスマスチャンを通してしか働かれない。キリストは、パウロの場合は直接、キリストが働かれたんでしょ。彼をぶつ倒されたんでしょ。ああいうのは特別で、普通は我々信徒を通してキリストはご自身を人々に証しなさる。だから、我々一人一人がいかに大事か。しかもそれは我々の中から出てくるのではない。キリストが乗り移って、そして御業を展開していく。

●彼らみな聖霊にて満たされ

それが歴史的に起こっているのがペンテコステなんです。使徒行伝のあそこを読みますと、凄いですよ。2章です。「五旬節」というのは、「50日目」ということ、キリストが十字架にかかられて復活されてからちょうど50日目にあたる日ということなんです。

「五旬節の日となり、彼らみな一処ひとところに集い居りしに、²烈しき風の吹ききたるごとき響、にわかなに天より起りて、

これは彼ら信徒が呼び起こしたのではなくて、神・キリストの御業がここで起こったんです。彼らはそこで祈っていたんでしょ。

その坐する所の家に満ち、³また火の如きもの舌のように現れ、分れて各人の上にとどまる。⁴彼らみな聖霊にて満たされ、御霊の宣べしむるまことごとくまに異邦の言にて語りはじむ。

凄いことが起こりました。

⁵時に敬虔なるユダヤ人ら、天下の国々より来りてエルサレムに住み居りしが、⁶この音おこりたれば群衆あつまり来り、おのおの己おののこが国語こくごにて使徒たちの語るを聞きて騒ぎ合あひ、⁷かつ驚き怪しみて言う『視よ、この語る者は皆ガリラヤ人ならずや、⁸如何にして我等おのおのの生れし国の言ことばをきくか。⁹我等はパルテヤ人、メヂヤ人、エラム人、またメソポタミヤ、ユダヤ、カパドキヤ、ポント、アジヤ、¹⁰フルギヤ、パンフリヤ、エジプト、リビヤのクレネに近き地方などに住む者、ロマよりの旅人——ユダヤ人および改宗者——¹¹クレテ人およびアラビヤ人なるに、

つまり、当時の世界中から人々が集まっていた。

我が国語にて彼らが神の大なる御業みわざをかたるを聞かんとは』¹²みな驚き惑いて



互に言う『これ何事ぞ』¹³ 或者どもは嘲りて言う『かれらは甘き葡萄酒にて満たされたり』

¹⁴ ここにペテロ十一の使徒とともに立ち、声を揚げ宣べて言う『ユダヤの人々および凡てエルサレムに住める者よ、汝等わが言に耳を傾けて、この事を知れ。¹⁵ 今は朝の九時なれば、汝らの思うごとく彼らは酔いたるに非ず、¹⁶ これは預言者ヨエルによりて言われたる所なり。

¹⁷ 「神いい給わく、末の世に至りて、我が霊を凡ての人に注がん。汝らの子^{むすこむすめ} 女は預言し、汝らの若者は幻影^{まぼろし}を見、なんじらの老人は夢を見るべし。¹⁸ その世に至りて、わが僕・婢女^{しもべはしため} にわが霊を注がん、彼らは預言すべし。¹⁹ われ上は天に不思議を、下は地に徴をあらわさん、即ち血と火と煙の氣とあるべし。²⁰ 主の大なる顕著^{いちじる}しき日のきたる前に、日は闇に月は血に変わらん。²¹ すべて主の御名を呼び頼む者は救われん」

²² イスラエルの人々よ、これらの言を聴け。ナザレのイエスは、汝らの知るごとく、神かれに由りて汝らの中に行い給いし能力^{ちから}ある業^{わざ}と不思議と徴とをもて、汝らに証し給える人なり。²³ この人は神の定め給いし御旨^{みむね}と、預じ^{あらか}め知り給う所とによりて付されしが、汝ら不法の人の手をもて釘磔^{はりつけ}にして殺せり。²⁴ 然れど神は死の苦難^{くるしみ}を解きて之を甦えらせ給えり。彼は死に繋がれおるべき者ならざりしなり。²⁵ ダビデ彼につきて言う

「われ常に我が前に主を見たり、我が動かされぬ為に我が右に在^{いま}せばなり。²⁶ この故に我が心は楽しみ、我が舌は喜べり、かつ我が肉体もまた望の中に宿らん。²⁷ 汝わが靈魂^{たましひ}を黄泉^{よみ}に棄て置かず、汝の聖者の朽ち果つることを許し給わざればなり。²⁸ 汝は生命^{いのち}の道を我に示し給えり、御顔の前にて我に歡喜^{よろこび}を満たし給わん」

²⁹ 兄弟たちよ、先祖ダビデに就きて、われ憚^{はばか}らず汝らに言うを得べし、彼は死にて葬られ、その墓は今日に至るまで我らの中にあり。³⁰ 即ち彼は預言者にして、己の身より出づる者をおのれの座位^{くわい}に坐せしむることを、誓^{ちか}をもて神の約し給いしを知り、³¹ 先見して、キリストの復活^{よみがえり}に就きて語り、その黄泉^{よみ}に棄て置かれず、その肉体の朽ち果てぬことを言えるなり。³² 神はこのイエスを甦えらせ給えり、我らは皆その証人なり。³³ イエスは神の右に挙げられ、約束の聖霊を父より受けて、汝らの見聞きする此のものを注ぎ給いしなり。³⁴ それダビデは天に昇りしことなし、然れど自ら言う

「主わが主に言い給う、³⁵ 我なんじの敵を汝の足台となすまでは、わが右に坐せよ」

と。³⁶ 然ればイスラエルの全家は確^{しか}と知るべきなり。汝らが十字架に釘^つけし此



のイエスを、神は立てて主となし、キリストとなし給えり』

³⁷人々これを聞きて心を刺され、ペテロと他の使徒たちと言ふ『兄弟たちよ、我ら何をなすべきか』³⁸ペテロ答う『なんじら悔改めて、おのおの罪の赦を得んために、イエス・キリストの名によりてバプテスマを受けよ、然らば聖霊の賜物を受けん。』³⁹この約束は汝らと汝らの子らと、凡ての遠き者すなわち主なる我らの神の召し給う者と共に属くなり』⁴⁰この他なお多くの言をもて証し、かつ勧めて『この曲れる代より救い出されよ』と言えり。⁴¹かくてペテロの言を聴き納れし者はバプテスマを受く。この日、弟子に加わりたる者、おおよそ三千人なり。⁴²彼らは使徒たちの教を受け、交際をなし、パンを擘き、祈禱をなすことを只管つとむ。

⁴³ここに人みな敬畏を生じ、多くの不思議と徴とは使徒たちに由りて行われたり。⁴⁴信じたる者はみな偕に居りて諸般の物を共にし、⁴⁵資産と所有とを売り、各人の用に從いて分け与え、⁴⁶日々、心を一つにして弛みなく宮に居り、家にてパンをさき、歡喜と真心とをもて食事をなし、⁴⁷神を讚美して一般の民に悦ばる。かくて主は救わるる者を日々かれらの中に加え給えり。』

こういう初代の教会です。ここからいわばキリストの教会がスタートした。そういう意味で教会の誕生記念日、これがこの五旬節の出来事なんです。

●キリストは我々を通して働かれる

ついでながら、第3章にいきますと、不思議なことが次々と起こっていきます。

「1 昼の三時のりの時に、ペテロとヨハネと宮に上りしが、²ここに生れながらの跛者かかれて来る。宮に入る人より施済を乞うために、日々宮の美麗という門に置かるるなり。³ペテロとヨハネとの宮に入らんとするを見て施済を乞いたれば、⁴ペテロ、ヨハネと共に目を注めて『我らを見よ』と言ふ。⁵かれ何をか受くるならんと、彼らを見つめたるに、⁶ペテロ言ふ『金銀は我になし、然れど我に有るものを汝に与う、ナザレのイエス・キリストの名によりて歩め』⁷乃ち右の手を執りて起ししに、足の甲と踝骨とたちどころに強くなりて、⁸躍り立ち歩み出して、且あゆみ且おどり、神を讚美しつつ彼らと共に宮に入れり。⁹民みな其の歩み、また神を讚美するを見て、¹⁰彼が前に乞食にて宮の美麗門に坐しいたるを知れば、この起りし事に就きて驚駭と奇異とに充ちたり。

¹¹かくて彼がペテロとヨハネとに取りすがり居るほどに、民みな甚だしく驚きてソロモンの廊と称うる廊に馳せつとう。¹²ペテロこれを見て民に答う『イスラエルの人々よ、何ぞ此の事を怪しむか、何ぞ我らが己の能力と敬虔とに



よりて此の人を歩ませしごとく、我らを見つむるか。¹³ アブラハム、イサク、ヤコブの神、われらの先祖の神は、その僕イエスに栄光あらしめ給えり。』

ここが大事ですね。キリストはこのペテロを通して、あるいはヨハネを通して、働いている。それはペテロにしろ、ヨハネにしろ、キリストが彼らを通して働かれているだけであつて、ヨハネやペテロが何者かでは絶対でない。これはとても大事なことです。往々にして宗教の教祖というのは自分が何者かになつたかのようにして、自分を崇めることを求めていますね、世間では。ところが、ここでのペテロとかヨハネは、キリストが自分たちを通して働きのなっているわけで、自分たちは何者でもないという。小池先生の言う「無者」に徹しているわけです。

我々はみなそうなんです。キリストは我々を通して働かれる。自然現象は人と関係なく働きます。雷が落ちた、やれ何が起こつたと。ところが、どうも神様の世界は信徒を通して働きのなる。つまり、神様は直接、人々にお働きのなるということは極々例外なことなんです。例外というのはパウロがそうです。キリストが直接、パウロに働きかけて、パウロはぶつ倒された。でも、そういう極々例外を除いて、みな直接にお働きのならない。信徒一人一人を通して働きのなる。

そういう意味では、我々は非常に大事な存在なんです。つまり、我々を通して神・キリストは働きたもう。我々はキリストに全面的に託して委ねていく。それが大事なんです。ペテロはここで、ペテロが何者かといった思いではなく、自分たちを通して神様がキリストの御業をペテロを通してなさっている。

「ペテロ何者ぞ、ヨハネ何者ぞ」ということ。みな無者である。無者だからこそ、ペテロやヨハネを通してキリストが100%働きのなる。

この我々だつてそうなんです。我々が何者かではない。我々はキリストに全托して、「主さま！」と言つて動くことが、そういう我々を通して、主さまが働きたもう。そして、自分たちは、

「ありがとうございます。こんなつまらない人間を通して——いやつまらないからこそ——あなたは素晴らしい御業をなさってくださいました。ありがとうございます。います」

と、そういう感覚になってきます。私はそう思っています。そういうことが、この使徒行伝の2章、3章なんかを通して語られているということ、また皆さん、ゆつくりとこの使徒行伝を読んで辿つていただければ、ありがたいと思います。

●主さまに自分を明け渡す

今、こうしたことを申し上げましたのは、皆さんに呼びかけたいのは、「守りの信仰から



攻めの信仰への転換」ということです。「守り」というのは現状維持、何とか現状を守って
いこうという、そういう現状維持的な在り方です。それに対して「攻め」というのは、新
しい事態をどんどん展開していく。つまり、キリストは皆さんお一人お一人を通して御業
を展開しようとなさっている。それを我々の側で、

「私はまだ信仰がうすくて、私はまだこれこれで、まだだめです、だめです」と、ブレ
ーキをかけたなら申し訳ない。こつちはゼロ、空っぽでいい。キリストが働きたも
うから。それが証し人です。

別な言葉でいえば、キリストは直接、人々に働かれることは例外なんです。パウロなん
かの場合には直接、キリストは働いて、パウロはぶつ倒されたけれども。そういう例外を
除いては、信徒一人一人を通して働かになる。雷なんかは直接落ちます。でも、キリス
トは雷ではなくて、信徒一人一人を通して働かになる。ということは、皆さんお一人お
一人はいかに大事な存在かということなんです。

それでは、自分たちはどうするのか？ 主さまに自分を明け渡すんです。

「主さま、どうぞ、私を通してあなたがご自分のご計画通りに御業を展開してくだ
さい。私は明け渡していきます。主さま、どうぞよろしくお願いいたします」

と。それで初めて私たち地上にいる者と、天上の天界のキリストとがワンセットになって、
御業が展開していく。なんとありがたい役割を私たちはいただいているんだろうと。

「主さま、ハレルヤです、讚美です！」
と言わざるをえませんですね。

別な言葉でいえば、我々一人一人を通さないと、キリストは直接には人間に働き給わない。
パウロみたいに、ああいう例外的になさることもあるのでしようけれども、多くの場合に
は、皆さんお一人お一人を通してしかキリストは働かれない。いかに皆さんお一人一人
が大事な存在かという、なくてはならない存在である。何がなくても、そういうキリス
トの僕として働かしていただく。いや、皆さん一人一人をキリストが捕まえて、御業をなさる。
なんとありがたい名誉なことを我々はいただいているか。そのことを本当に受けとって讚
美していただきたい。

私が今日、皆さんに申し上げたいのはそれなんです。「守りの信仰から攻めの信仰へ」と
いうこと。現状維持で何とか、いただいた永遠の生命を守っていかうなんていう、保守的
な考えではなく、自分を通して、皆さん一人一人を通して、キリストは新しい御業を展開
していかれる。そのために私たちを用いてくださる。

「ありがとうございます、どうぞ、存分に私を捕まえて、お用いください。火の中、
水の中、どこへでも参ります！」

という、そういう勇ましい姿で我々は歩んで行ける。これが私の言いたい、「守りの信仰の
現状維持か、攻めの信仰、新しい事態を展開していくという信仰に転換か」、これを是非



今日を機会に、皆さん、始めていただきたいんです。

「主さま、お委ねいたします。どうぞ、私を通してあなたが御業を展開してください。それが私の願いです。よろしくお願いいたします」

と。それは自分ではできるはずがありませんよ。けれども、

「主さま、明け渡します。あなたは直接、人に働きかけ給わない。私という人間を通してしか、人々に働きたまわらないと、今日、ペンテコステで聴きました。ですから、どうぞ、主よ、この僕・婢女を通して、あなたが御業を展開してください。それを見せてください。そうしたら、私はもう万才三唱いたします」

と。これが、「守りの信仰から攻めの信仰へ」と、私が申したいことなんです。

今まで、皆さん、どうでしたか？ 案外、攻めの信仰ではなかったのではないのでしょうか？ 少なくとも、私は自分に關しては何かそんな感じがする。これは申し訳ない。主はこの身を通して御業をなさろうとなさっている。それを妨げてはならない。現状で縮こまっていたら申し訳ない。

「主さま、この身を通してあなたが御業を展開してください。これが私の喜びです」と。そういうことです。

● 我は火を地に投ぜんとて来れり

ルカ伝の12章49節を見てください。これはキリストの祈りというか、嘆きというか。

「⁴⁹我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。⁵⁰されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるま

では、思い逼ること如何ばかりぞや。」(ルカ12・49〜50)

これはキリストの呻きですよ。「火」というのは聖霊の火でしょ。聖霊の火を投じようとしてやって来た。その火が既に燃えてくれたら、こんなうれしいことはないんだけど、しかし、その火が降ってくるためには、火が燃えるためには、受くべきバプテスマがある。死のバプテスマ、十字架ですよ。つまり、十字架でキリストが贖いわざを遂げなければ、聖霊の火は地に降ってこない。いくらキリストが望まれても、キリストが血のバプテスマ、十字架をくぐりぬけてくださらないと、人々に聖霊という火は降ってこない。罪びとですから、罪あるところに聖なる霊は降れない。聖なる霊、火が人々に降ってくるのは、キリストご自身が十字架で贖い業をなしとげてくださらなければ、始まらない。しかし、それが成就するまではキリストは苦しみ給うわけですよ。そういうことがここで言われていると思う。

「⁴⁹我は火を地に投ぜんとて来れり。

聖霊という火を投ぜんとて来た。

此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。



この火がすでに燃えていてくれたら、これほどうれしいことはないんだけど、しかしその火が燃えるためには、

⁵⁰されど我には受くべきバプテスマあり。

受くべきバプテスマ、血のバプテスマ、十字架で私が罪の贖いを全うしないと、この聖霊は降ってこない。そのことをここで訴えておられる。

その成し遂げらるるまでは、思い逼ること如何ばかりぞや。⁵¹われ地に平和を
与えんために来ると思ふか。われ汝らに告ぐ、然らず、反つて分争なり。⁵²今

よりのち一家に五人あらば、三人は一人に、二人は三人に分れ争わん。⁵³父は

子に、子は父に、母は娘に、娘は母に、^{しゅうとめ}姑姆は嫁に、嫁は姑姆に分れ争わん』

(ルカ12・49～53)

そういう本当に聖霊の事態が人々の中に実現するには、キリストご自身が十字架にかかって、我々の罪・咎を全部片付けなければ、本当に聖霊の火は降らない。キリストは、我々一人一人を通して御業をなさろうとしても、この我々の背きという罪、自我の囚われというものを片付け給わないと、聖なる霊は我々の中に入ってくることができない。そういうことをここで言っておられると思う。

「我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火がすでに燃えていてくれたらと、どんなにか願うことか。しかし、それが成就するには、十字架という血のバプ

テスマを自分なくぐりぬけなければならない。」

そういうキリストの切羽詰まった御思いがルカ伝のこの箇所だと私は思う。同時に、キリストはそれを突破してくださった。妨げるものは何もない。そしたら今度は、聖霊が我々の中に乗り込んでくださる。

つまり、私たちは聖霊を受けとって、キリストの証し人として働くのに邪魔になるものは全部取っ払われている。それはキリストのゆえなんです。我々が自分でつくりだしたのではない。キリストがやってくくださった。キリストがやってくくださったから、私たちは「ありがとうございます」と受けとる以外に何も無い。

「でも、私はまだ信仰がうすくて。でも、まだ私はこれこれ……」

とか。いつか小池先生が仰った、「デモ行進はやめましょう」ということ。「でも、まだ私は……」という「でも」なんていうことを全部ぶっ壊したのが十字架ではないですか。

「われ主と共に十字架に付けられたり。もはや、旧き我、肉なる我、エゴなるわれ生くるにあらず。復活のキリスト、御霊のキリスト、わがうちにありて生き給うなり」

これだと。これを貫いて行くのではないかということをお池先生は呼びかけられた。そして、私たちは「はい、ありがとうございます」と、受けとるしかないんです。

ですから、これまで皆さんのほうで何か妨げを感じておられることがあったら、そ



れはもう今日限りさっぱりと捨て去って、

「主さま、あなたをお受けいたします。われ主と共に十字架せられたり。もはや我生くるにあらず。復活のキリスト、御霊のキリスト、わがうちに在りて生き給うなり」

という、そういう事態へと転換していく。

これを今日、本当に受けとつてください。この機会に、改めて皆さんに私は申し上げたい。そして、

「主さま〜！」

と言って、手を合わせて天へ向かって祈っていく。そういう姿で、新しい歩みを始めていただきたい。それを私は申し上げます。日常生活の中で——特別の日だけではない——我々の日々の日常生活の中で何事でも積極的に祈り求めていく。小池先生もご自分の讚美歌（A 10「汝れわが衷に」）で、

「汝れわが衷に しかと宿りて 祈り求めよ さらに成るべし」

そういう歌を作っておられます。「汝れわが衷にしかと宿りて」という、「しかと宿る」には十字架でもう私たちのエゴ、自我、背きを全部ぶつ飛ばしてくださった。だから、宿れるように、

「我は道なり真理なり生命なり」

と言って、ちゃんと道になってくださった。その道を我々は踏みしめ踏みしめ、主の中に宿ることが出来るわけです。

●我が名に在りて我に願わば我これを成すべし

キリストはマルコ伝11章で、

「凡て祈りて願う事は、すでに得たりと信ぜよ、さらば得べし。」（マルコ

11・24）

と。それからへブル書11章の、

「それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり。」（へブル11・1）

御言に基づいて望むところを確信する。御言のほうで先に下さっているんです。御言に基づいて望むところを確信し、まだ見てないものを既に得たりとして受けとっていく。こういう姿です。それから、ヨハネ伝14章に、

「¹²誠にまことに汝らに告ぐ、我を信する者は我がなす業をなさん、かつ之よりも大なる業をなすべし、われ父に往けばなり。¹³汝らが我が名によりて願う

ことは、我みな之を為さん、父、子によりて栄光を受け給わんためなり。¹⁴何事¹⁴にても我が名によりて我に願わば、

「我が名によりて、」は「我が名に在りて、」と小池先生はここを受けとっておられました。



我これを成すべし。¹⁵汝等もし我を愛せば、我が誠命を守らん。¹⁶われ父に請わん、父は他に助主(聖霊)をあたえて、永遠に汝らと偕に居らしめ給うべし。¹⁷これは真理の御霊なり、世はこれを受くること能わず、これを見ず、また知らぬに因る。なんじらは之を知る、彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給うべければなり。¹⁸我なんじらを遣して孤兒とはせず、汝らに来るなり。¹⁹暫くせば世は復われを見ず、されど汝らは我を見る、われ活ければ汝らも活くべければなり。²⁰その日には、我わが父に居り、なんじら我に居り、われ汝らに居ることを汝ら知らん。²¹わが誠命を保ちて之を守るものは、即ち我を愛する者なり。我を愛する者は我が父に愛せられん、我も之を愛し、之に己を顕すべし』云々」

と。ここからはずつと助け主、聖霊のことを言っていていらつしやる。

²⁵此等のことは我なんじらと偕にありて語りしが、²⁶助主すなわちわが名によりて父の遣したもう聖霊は、汝らに万の事をおしえ、又すべて我が汝らに言いしことを思い出さしむべし。²⁷われ平安を汝らに遺す、わが平安を汝らに与う。わが与うるは世の与うる如くならず、なんじら心を騒がすな、また懼るな。²⁸「われ往きて汝らに来るなり」と云いしを汝ら既に聞けり。もし我を愛せば、父にわが往くを喜ぶべきなり、父は我よりも大なるに因る。」(ヨハネ 14・12〜28)

このヨハネ伝14章から16章は、よく読んでいただきたいと思えます。

●主の幼児であれよ

もう一度まとめて申しますと、今日、私が皆さんに申し上げたいことは、「守り」の信仰から、つまり現状維持的な守りの信仰から、「攻め」の信仰へと、新しき事態へとどんどん展開していく。そういうふうには、我々の日常の在り方を変えていこうではないかということをし上げたい。日常生活の中で、何事でも積極的に祈り求めていく。

いや、私自身が積極的にしか祈り求めていくという、その点で少し乏しかったのではないかというふうには実は反省した。もつともつと主の幼児としてありたい。幼児はもつともつと単純率直でしょ。「お父ちゃん!」と言って抱きついてきます。うれしい時はうれいと言うし、悲しい時は悲しいと言う、そういうふうには単純率直なんです。主は、

「あなた方は幼児のごとく神の国を受けとらなくてはだめだよ」

と何度か仰っています。非常にキリストは幼児を愛されました。そうすると、我々は主の幼児でありたいんです。「主さま〜!」と言って抱きついていく、すがりついていく。「御名をたたえま〜す!」という、そういう単純率直な在り方、これで徹していこうと。

賢い大人になる必要はない。主の幼児でありたい。それが私の願いです。今日、皆さん



に申し上げたいのはそのことなんです。何も賢くなる必要はない。主の幼児であれよと。うれしい時はうれしい、

「主さま、うれしいです。主を讚美します」と。辛い時は、

「辛いです、主よ、何とかしてください」

と。そういう非常に率直な在り方。それを我々は求められているのではないのでしょうか。

皆さんは、あまり賢くなりすぎないように。主の幼児であってください。それが、私が今日皆さんに申し上げたい、自分自身に言い聞かせていることなんです。

「凡て祈りて願う事は、すでに得たりと信ぜよ、さらば得べし。」(マルコ 11・24)

「それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり。」(ヘブル11・1)

「汝らが我が名によりて願うことは、我みな之を為さん、父、子によりて栄光を受け給わんためなり。」(ヨハネ14・13)

こういう御言を単純率直にそのまま受けとっていいこうではないか。そして、感謝と讚美の祈りを捧げていいこうではないか。

● 祈りたることは既に叶えられたり

主がラザロを甦らされた時にどのような祈りをなさいましたか。

「既に聴いてくださったことを感謝します」

と言って祈っておられる。そして、

「ラザロよ、出てこい!」

と言われたら、ラザロは出てきた。つまり、出てくる前に——出てきたから讚美されたのではない——出てくる前に、

「主よ、祈りを既に聴いてくださったことを感謝します。常に祈りを聴いてくださっていることを感謝します。このように言うのは、まわりにいる人々があなたを信ずることができるよう、そのためであります」

と。そして、「ラザロよ、出できたれ!」と言われたら、ラザロは出てきた。あの場面です。つまり、申し上げたいのは、信仰というのは、我々がキリストからいただいた次元といふのは、まだ起こっていないこと。しかし、神の国を主は約束して、私たちを通して御業をなさろうとして、そのために私たちは自分たちを主に預けていく。

「主よ、どうぞ、この身を通して、あなたの御業を展開してってください。私は何者でもありません。主よ、あなたに依り継り、あなたにしがみついています。どうぞ、この身を通して御業を展開してください」

と、しがみついているければ、主は与えてくださる。それだけでいいという。立派な信仰とか、



そんなものは要らない。

「主よ、あなたにしがみつきます。どうぞ、この身を通して、あなたのみ思い、御業を展開してください。主よ、お願いいたします。主よ、この祈り、願いを聴いてくださったことを感謝いたします」

と。そうやって、

「祈りたることは既に叶^{かな}えられたりませよ。願いたることは既に叶えられたり

とせよ」

と、そういうふう祈らされて、そして祈ったことは叶えられたとして感謝して讃美していく。こういう在り方、これが私は「攻め」の姿勢と見ている。

「既にしてくださったから、ありがとうございます」

と、これは「守り」の姿勢、誰でもできますよ。我々が賜っている世界は、

「主よ、感謝します。主よ、讃美します。主よ、このような祈りを、願いを我々に、私に与えてくださったことを、主よ、讃美いたします」

と。何かそういうふうにして、

「それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり」

と、ヘブル書に出てきているように、そういう言葉が実現成就していく。そういう在り方へと私たちは導かれている。そのことを今日、皆さんに伝えたい。

そういうことでございます。それでは、これで終ることにいたします。

● 祈り

しばらく黙祷いたします。私が祈りますので、そのあとまた二、三の方にお祈りいただきたいと思えます。

主さま、御名を讃え、感謝いたします。主さま、あなたが与えてくださった世界、あなたから賜っている本当に素晴らしい世界をあなたは私たちにプレゼントしてくださいました。

「見ずして信する者は幸いなり」

と仰いました。また、

「信仰とは望むところを確信し、見ぬものを信実とするなり」

と……（以下録音切れ）

